

佐世保市令和2年度 要録様式（佐世保版）改訂版 アンケート調査に関する報告書

門田理世（西南学院大学）

諫山裕美子（久留米大学） 沖本悠生（九州産業大学）

佐世保市幼児教育センター

## 1. はじめに

佐世保市では平成27年度、保育所、認定こども園、幼稚園（以下、乳幼児教育・保育施設）の要録を可能な限り統一した新要録様式（佐世保版）を導入し、保幼小連携の推進をはかってきた。その後、平成30年度に施行された要領・指針や、アンケート調査結果をもとに要録様式について協議を重ね、新たに令和元年度から要録様式（佐世保版）改訂版の施行に至った。改訂版は、これまで幼稚園・認定こども園と保育所で2種類の様式だったところを全施設で1種類の統一様式とし、学籍・指導の記録も1枚に収めた。今年度は、導入から一年を経た改訂版要録様式の活用実態、活用における保育者や教員の意識について把握することを目的とし、調査を行った。以下、アンケートの分析結果について、要録の活用実態、要録の意義と展望を報告する。併せて、本調査内で令和3年3月に発行される「接続カリキュラムガイドライン」に関する意識調査も行ったため、その分析結果も今年度の報告書に付記している。

## 2. アンケート調査の概要

【調査対象】 佐世保市内の保育所、認定こども園、幼稚園、小学校      【調査期間】 令和2年9月

【アンケート対象者】

乳幼児教育・保育施設：年長児担任（要録を記入した職員）、園長・主任（要録送付等にかかわった職員）

小学校：要録を受け取り、読んだ職員

【アンケート調査項目】

表1 アンケート調査項目

	小学校	乳幼児教育・保育施設
I 属性	性別、年齢、担当職務	
II 要録様式について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け取った要録を読む時期</li> <li>・今年度入学した1年生の要録既読の有無</li> <li>・要録を受け取る目的</li> <li>・受け取った要録の活用への希望</li> <li>・要録様式（佐世保版）改訂版への意識</li> <li>・要録を読む際に戸惑った部分</li> <li>・要録の内容について、乳幼児教育・保育施設の先生方と共有する場面や目的</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要録の発送時期</li> <li>・小学校に送った要録を読んでほしい時期</li> <li>・要録を書く目的</li> <li>・小学校に送った要録の活用への希望</li> <li>・要録様式（佐世保版）改訂版への意識</li> <li>・要録様式（佐世保版）改訂版を記述して思ったこと</li> <li>・要録を記述する際に戸惑った部分</li> <li>・要録の内容について、小学校の先生方と共有する場面や目的</li> </ul>
III 保幼小連携について	現在の保幼小連携の段階 「保幼小連携接続カリキュラム」ガイドラインへの関心、活用に関する意識	

【アンケート施設別回答数】

表2 アンケート施設別回答数

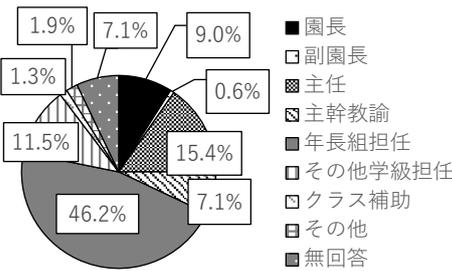
	送付施設数	回答施設数	施設回収率		個人回答数	
			H30年度	今年度	H30年度	今年度
乳幼児教育・保育施設	105	91	96.1%	84.8%	166	156
内訳						
保育所	59	48	93.4%	81.4%	83	76
認定こども園	37	36	100%	97.3%	63	68
幼稚園	9	5	100%	55.6%	20	10
施設不明		2				2
小学校	47	43	100%	91.5%	84	71
総数	152	134	97.3%	88.2%	250	227

### 3. 結果

※以下、表やグラフの表記は乳幼児教育・保育施設を「乳幼児」、小学校を「小」、乳幼児教育・保育施設と小学校と合わせた回答全体を「全体」とする。

#### I アンケート回答者の属性

アンケートの対象者を、乳幼児は昨年度要録を取り扱った職員とした結果、昨年度の担当職は、年長組担任が46.2%であり（図1）、この内、昨年度の要録記入を行った回答者は55.8%と、約半数が改訂版の要録様式に記入している回答者となった（図2）。小での最も多い回答者は1年生担任の64.8%であった（図3）。なお、この昨年度の年長組担任と今年度の1年生担任の回答者の割合は、前回の要録に関するアンケート（平成30年度）でもほぼ同じ数値を示しており、回答者の属性に関しては、ほぼ同様の傾向であった。



※「主任」の内1名が「年長組担任」を兼務  
図1 昨年度の担当職（乳幼児）

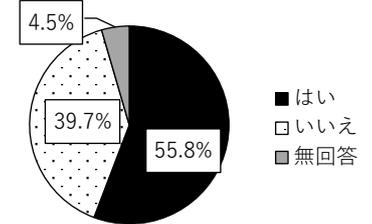
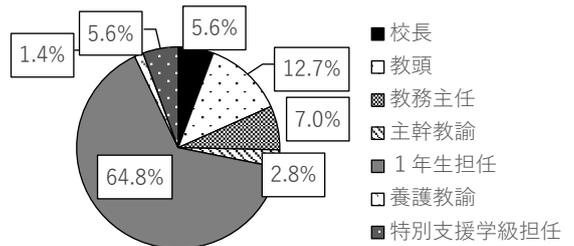


図2 昨年度の要録記入（乳幼児）



※「教務主任」の内2名が「1年生担任」を兼任  
図3 今年度の担当職（小）

#### II 要録様式（佐世保版）改訂版の活用実態・意義・目的について

##### 1) 要録の発送時期 乳幼児

要録の発送時期は3月下旬が最も多く103（66.0%）、次いで3月中旬が25（16.0%）であり、回答のあった137のうち97.8%が3月の発送であった。

##### 2) 要録を読む時期 小

小に要録を読む時期を尋ねたところ（図4）、最も多い回答は「4月1日から入学式まで」で60.6%、次いで「受け取ってすぐ読む」が49.3%であり、入学前に要録を読んだ回答者は84.5%（60名）であった。この項目は複数回答としており、1つ以上を選んでいった複数回答者が98.6%だったことから、小学校では受け取った要録を1度だけではなく用途にあわせて複数回読み、活用していることが明らかとなった。

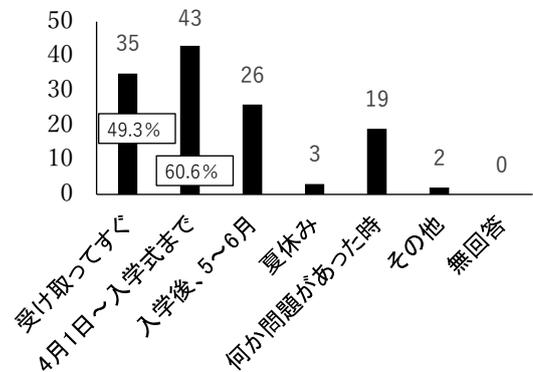


図4 要録を読む時期（小）

##### 3) 要録の既読の有無 小

小に今年度入学した子どもの要録を読んだか尋ねると、70名（98.6%）の回答者が要録を読んでおり、その内、「全員分読んだ」が71.8%、「簡単に全体を把握した」が19.7%、「数人分読んだ」が7.0%、無回答が1.4%であり、読んでいないとした回答はなかった（図5）。「全員分読んだ」回答者以外（26.7%）は、全員分を読んでいない理由として、「担当クラスや気になる児童のみ把握する」という必要に応じた使用、「大規模校のため全員分読むことが難しい」「じっくり読む時間がない」という時間面の問題、「直接引継ぎを行っているため」という要録以外での情報伝達が挙げられた。

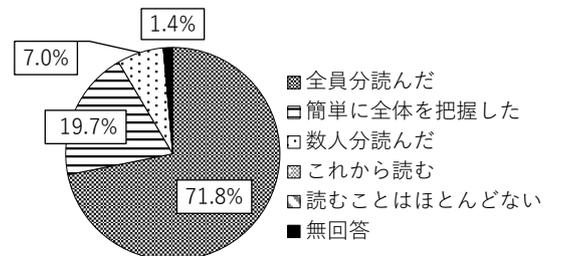
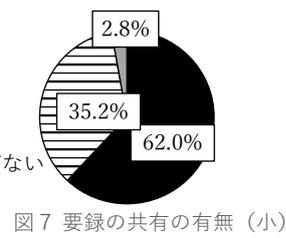


図5 今年度要録を読んだか（小）

#### 4) 要録を共有する場面と共有内容 全体

**要録の共有の有無** 要録の内容について、お互いどのような場面でどのようなことを共有しているか尋ねたところ(図6・7)、**乳幼児**では共有する場面を記入していた回答者が57.7%、**小学校**では62.0%であり、全体で59.0%が共有する場面があると回答していた。要録が「送る／送られる」ものだけでなく、実際に共有するツールとして使われていることが明らかとなった。



#### 要録の共有場面と共有内容 両施設にど

んな場面で要録を共有するか尋ねたところ、具体的な場面や状況、共有手段についての回答があり(図8)、様々な場面・状況において要録が共有されていることが明らかとなった。共有内容としては、特別な配慮が必要な子どもの情報や、気になっている子どもの対応、子どもの様子(育ち)、保護者との関わり等が挙げられた。その中でも、特別な配慮が必要な子どもに関する内容については、**乳幼児**では35.6%の回答者が共有すると回答していたが、**小**では約半数の54.5%が特別な配慮が必要な子どもに関する内容を共有していることがわかった。

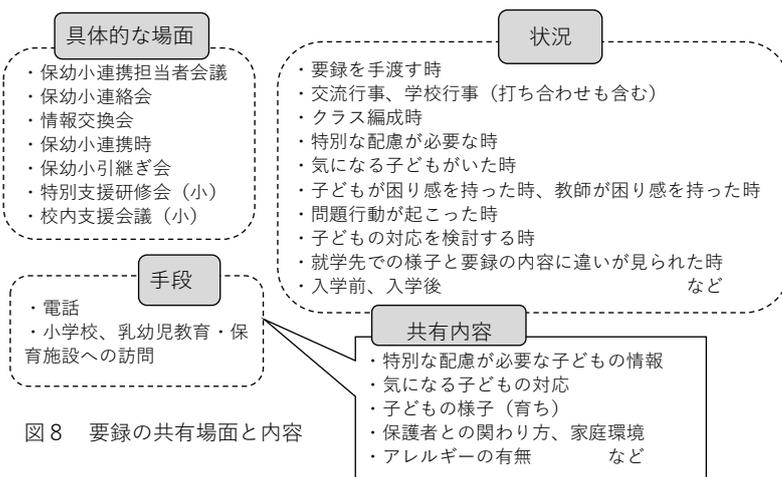


図8 要録の共有場面と内容

#### 5) 要録様式(佐世保版)改訂版に対する評価 全体

**改訂版への意識** 要録様式(佐世保版)改訂版に対しては、**全体**で81.4%が肯定的な意見であった(図9・10)。

上記の評価をした理由について尋ねたところ、**乳幼児**は「小学校側が見やすい・把握しやすい」、「同じ視点で子どもを見ることができる」など、〔小学校側の視点〕に立った良さが最も多くあげられた。また、〔記入する際、育ちをまとめて書ける〕良さや〔保幼小連携へのつながり〕といった意見があがった。**小**は「分かりやすい」「読みやすい」など、〔小学校としての把握のしやすさ〕と〔乳幼児教育・保育施設が統一〕されていることに対して高評価であった。

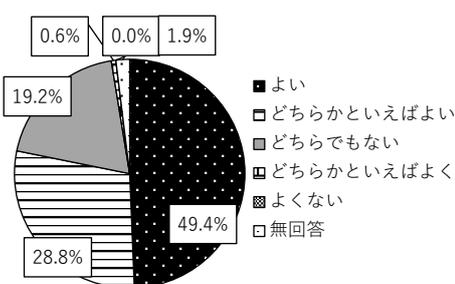


図9 改訂版に対する意識(乳幼児)

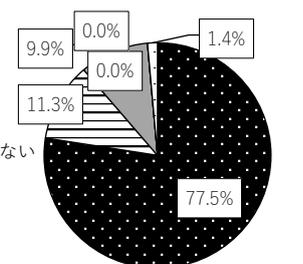


図10 改訂版に対する意識(小)

#### 改訂版の書きやすさ

**乳幼児**に改訂版の書きやすさを尋ねたところ、肯定的評価が55.1%、中間が25.2%、否定的評価が5.1%であった。無回答は14.1%である。肯定的評価としては、「簡潔になったこと」や「ポイントがまとまりがある」、「1枚で量が適切」などがあがった。一方で書きにくい点として「記入欄が狭くなった」「具体的な記入例をもう少し知りたい」などの意見があがったが、これらは書き慣れることで課題が少しずつ解決される見通しがもてる。

**戸惑った項目** **乳幼児**の戸惑った項目で最も多く選択されたのは『最終年度に至るまでの子どもの育ちに関わる事項』28名(17.9%)、次いで『子どもの育ち・教育・指導上の参考となる事項』12名(7.7%)であった。これらの戸惑いの自由記述からは、簡潔に書くことの難しさや、情報の出し方、育ちの表現などに悩まれる先生方の姿がみえた。ここから、保幼小連携の場を活用し、乳幼児教育・保育施設の間でも要録の内容について交流するという研修の必要性が示唆された。保育者間で要録記載の戸惑いを共有し合うだけでなく、書く側である保育者の戸惑いを読む側である小学校教諭が知ることを通して、双方の子ども理解が深まることが期待できる。今回、様式についてはなく、記載内容の質に戸惑いを表出する回答が多数を占めたことは、子どものことをどのように小学校に伝えるかに悩む保育者の実態を表したものと捉えられる。

一方で、**小**の「戸惑った項目」への回答はほぼなかった。

### 6) 要録様式(佐世保版)改訂版の意義 **全体**

**要録の目的** **乳幼児**に「要録を書く目的」、**小**に「要録を受け取る目的」を選択項目で尋ねた。選択項目は、これまで3年間のアンケートの自由記述で生成されたコードを用いた(図11)。

**乳幼児**で8割を超えた回答が「子どもがスムーズに移行できるように」、「子どもの育ちをつなげる」、「小学校における子どもの理解と指導」の3つで、**小**はそのうちの一つである「小学校における子どもの理解と指導」が95.8%と、ほとんどの人が選択した。

また、3項目以上を選択した回答者が**乳幼児**92.2%、**小**が83.1%で、多くの先生方が要録の目的を複数見出していることが明示された。

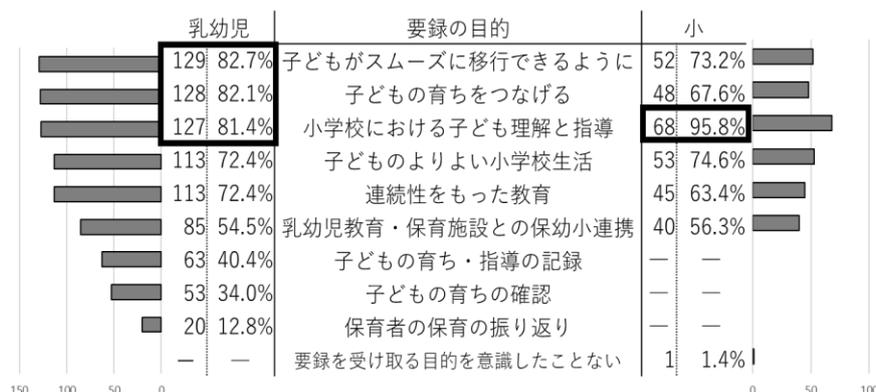


図11 要録を書く(乳幼児)/受け取る(小)目的

**要録の活用方法** **乳幼児**には「小学校で要録をどのように活用してほしいか」、**小**には「要録をどのように活用しているか」を尋ねた。選択肢項目は上記同様、過去のアンケート結果から作成した(図12)。その結果、1位の「子どもの理解・実態把握」がどちらも9割を超え、上位5項目が共通する結果となった。

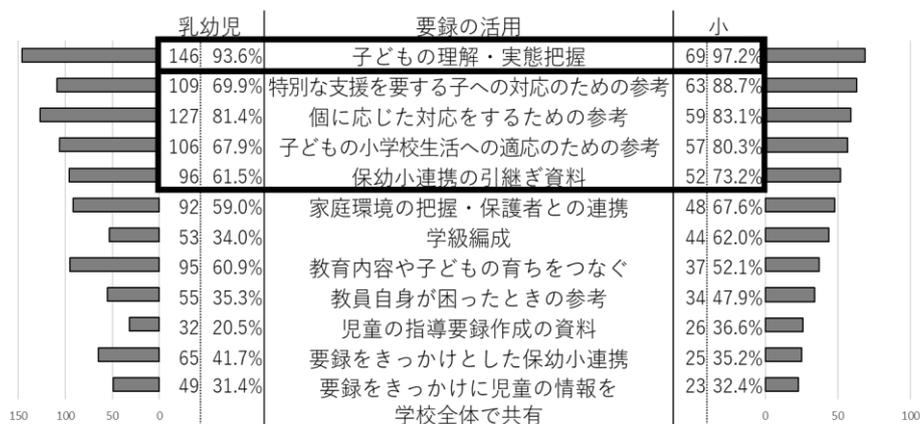


図12 要録の活用方法の希望(乳幼児)/実際の活用方法(小)

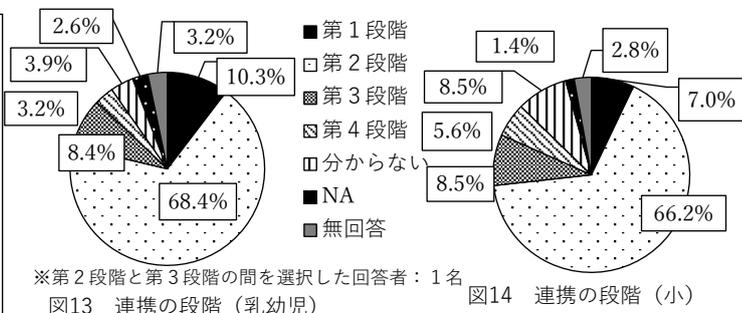
この質問においても、回答者の選択項目数を確認したところ、12項目中、**乳幼児**が6.6項目、**小**が7.6項目であった。つまり、**乳幼児**が期待するより、**小**の方が要録の活用方法を多様にとらえていることが明らかとなった。

### III 保幼小連携について

#### 1) 連携の段階

乳幼児と小に現在の連携の段階を尋ねたところ、両者とも「保幼小連携の推進、連絡体制の確立、保育・授業参観、行事への招待」の第2段階（交流段階）が約6割と最も多いことがわかった（図13・14）。第3段階（互恵性を求めた連携段階/接続カリキュラム試行段階）に向けて、今年度発行される「保幼小連携接続カリキュラムガイドライン」をいかに活用していくのかが重要になってくると思われる。

＜保幼小連携の段階＞	
<b>第1段階（はじめの一步段階）</b>	保幼小連携の啓発、近隣の施設・小学校の確認、研修会参加
<b>第2段階（交流段階）</b>	保幼小連携の推進、連絡体制の確立、保育・授業参観、行事への招待
<b>第3段階（互恵性を求めた連携段階/接続カリキュラム試行段階）</b>	保幼小連携の充実、互恵性のある連携活動、接続カリキュラム検討委員会の設置
<b>第4段階（接続カリキュラム実施段階）</b>	保幼小連携の発展（評価・改善）、接続カリキュラムの作成・実施



#### 2) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」への関心度

来年度から導入予定の保幼小連携

「接続カリキュラムガイドライン」に

関心があるかどうか尋ねたところ、

小では「関心がある」または「どちらかといえば関心がある」と答えた回答者は 91.6%（図15）、

乳幼児では 85.2%であり（図16）、ガイドライン

への関心度は約8～9割と高いことがわかった。その理由として、保幼小

連携・育ちの連続性・学びの連続性の

重要性、ガイドラインがもつ<連続性のある

保幼小の接続・連携><教育・保育に関する

理解促進>の有効性、<乳幼児教育・保育、

教育への参考資料><書類作成の参考資料

>等、多岐に渡って「接続カリキュラムガイ

ドライン」の価値・意義が挙げられた（図17）。

その一方で、少数意見として中間的・否定的

意見も見られた。その理由からは、ガイド

ラインへの自身の理解不足という<自身の課

題>、カリキュラムがあっても連携が難しい

という<保幼小連携の課題>、そして、<新しいガイドラインの内容次第>という意見が挙げられた。次年度より発行される保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」をどのように理解し、自園・自校の接続カリキュラムを作成するか、さらにはそれを活用してどのように保幼小連携の取り組みを進めていくか等、今後具体的に検討していくことが求められる。

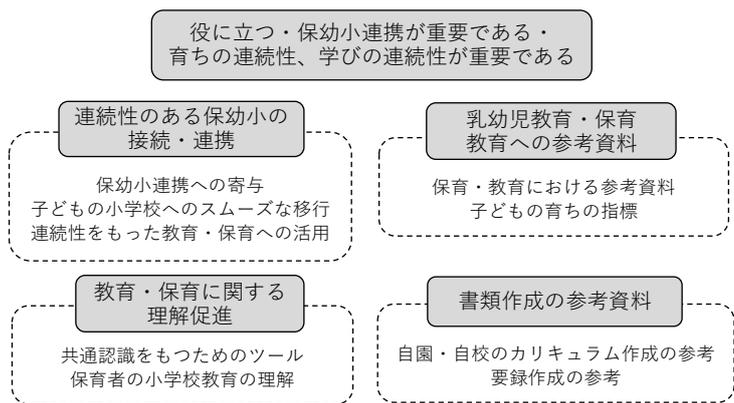
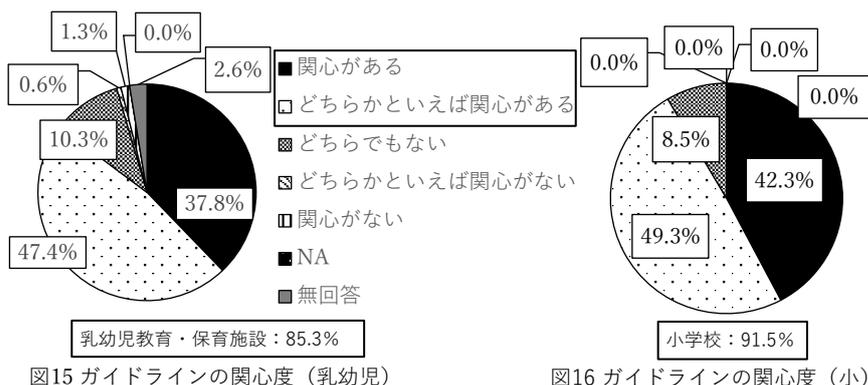


図17 ガイドラインへの肯定的な関心の理由（全）

### 3) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の活用に関する意識

保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の活用の意識について尋ねたところ、乳幼児・小ともに、「関心がある」または「どちらかといえば関心がある」と答えた回答者は 85.9%であり、活用の意識も約 8 割と高いことがわかった (図 18・19)。

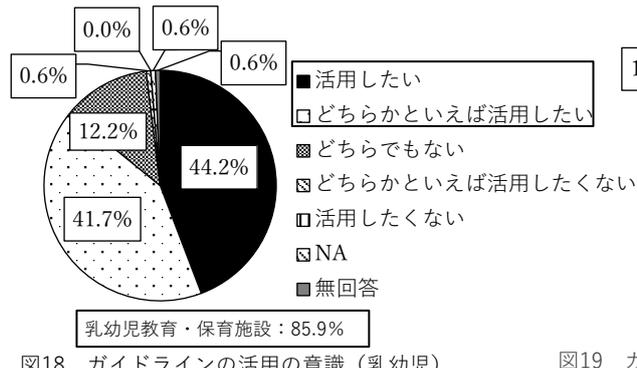


図18 ガイドラインの活用の意識 (乳幼児)

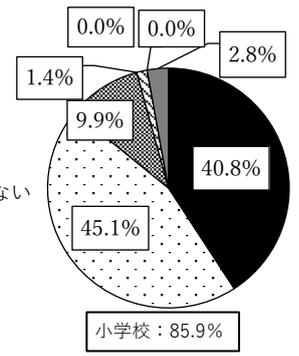


図19 ガイドラインの活用の意識 (小)

## 4. まとめと今後の課題

### 1) 要録に関するアンケート結果から

本調査より、令和元年度から導入された要録様式 (佐世保版) 改訂版の活用実態と、そこから佐世保市における要録の意義が明らかとなった。まず、乳幼児教育・保育施設が3月下旬頃までに送った要録を小学校側は入学前に読むだけでなく、用途にあわせて複数回読み、活用されていた。また、要録は様々な場面・状況において両者で共有されており、要録が乳幼児教育・保育施設から小学校への一方方向の送る／送られるものだけでなく、実際に共有するツールとして使われていることが明らかとなった。

要録様式 (佐世保版) 改訂版に対する評価は、概ね高評価であった。その理由として、幼稚園・保育所・認定こども園が1つの様式となったことで、受け取る小学校が分かりやすくなったことと同時に、記入する側も端的に育ちをまとめる良さが確認された。このことは、改訂版要録が保幼小連携を深化させるだけでなく、子どもの育ちを共に理解する手立てとなる機能を持つことが示されたといえる。

また、要録の活用方法の結果からは佐世保市の先生方が要録の目的・活用方法ともに複数の役割を見出していることがわかり、佐世保市全体で使用する統一要録の意義が使用する側の視点で確認された。

新しく導入された改訂版の要録様式 (佐世保版) が今後より活用されていくためにも、例えば「要録様式の書き方の研修を毎年受けることができるようにしてほしい」という先生方の要望に沿うように、オンデマンド型の研修方法の検討や要録様式の内容や活用方法の理解が進む支援の工夫が求められる。

### 2) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」に関するアンケート結果から

佐世保市では、次年度より新しく保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の導入を予定している。そのガイドラインへの関心度、さらには活用への意識も本調査から高いことが明らかとなった。その理由からは、保幼小連携の重要性を感じ、保幼小連携を進めていくために接続カリキュラムガイドラインを役立てていきたいという実践者の思いがうかがえた。今後、連携の段階を第3段階、第4段階へと進めていくためには、まず各園・各学校のカリキュラムの中に、接続カリキュラムが位置づけられることが肝要であり、その接続カリキュラムの作成に際して令和3年3月に発行される接続カリキュラムガイドラインをいかに用いるかが鍵となってくる。さらに、佐世保市の「接続カリキュラムガイドライン」が、保育者・教員にとって子どもの姿を振り返る羅針盤的な機能や日々の保育・教育の指標としての役割を果たすものになり、保育者・教員がガイドラインを基にして作成した各園・各学校の接続カリキュラムを共通理解しながら保幼小連携を進めていくようになるためにも、研修のあり方を含めた実用化に向けた施策が重要となってくる。

以上